JICA エキスパート

第12号
FEB.2010

みやざき

宮崎県JICA派遣専門家連絡会

CONTENTS

JKUATプロジェクトは不滅なり －JKUATと日本ババロア会の紹介－ 永田雅輝
「JICA九州設立20年～地域リソースとの更なる連携を」 小林正博
宮崎で夢見る農業 佐々木正吾
事務局からの報告

JKUATプロジェクトは不滅なり
—JKUATと日本ババロア会の紹介—

宮崎県JICA派遣専門家連絡会
会長 永田雅輝

宮崎県JICA派遣専門家連絡会の皆様には、ご健勝でご活躍のことと拝察申し上げます。

筆者がJICA派遣専門家としてケニア共和国へ派遣されたのは、今から24年前のことです。しかし、このように長い年月が経った今でも、所属したJKUATプロジェクトは別な形となって活動が続けられているのです。それは、ここで紹介する日本ババロア会であります。今年1月に日本ババロア会事務局からJKUATババロア信託基金年報が届きましたので、これまでの年報も参照して、JKUATプロジェクトの不滅を紹介したいと思います。

JKUAT（Jomo Kenyatta University of Agriculture and Technology, ジョモケニャッタ農工大学）は、JICAの教育協力プロジェクトでケニア共和国に設立された国立大学です。そのプロジェクトは1977年にスタートし、1980年に大学が開校されました。当時はJKCAT（Jomo Kenyatta College of Agriculture and Technology）の校名でしたが、事業進行する中で1985年にはJKUCAT（Jomo Kenyatta University College of Agriculture and Technology）と改名され、さらに1994年には総合技術系大学として校名をJKUATと再改名して今日に至っております。本プロジェクトはケニア国内での本格的な大学設立を目指す無償資金協力の支援事業で、当初5年の事業計画であったのが、延長されて1990年までの10年間がフェーズⅠとしてがなされました。さらにその後も2000年までの10年間の技術協力がフェーズⅡとしてなされ、トータル20年の長期にわたる高等教育の基盤整備、人材育成の支援が続けられました。本プロジェクトは2000年で終了しましたが、ケニア国の高等教育機関として大きな足跡を残し、ケニア国はもちろんアフリカでも屈指の水準を誇る技術系大学を作り上げたことから、JICAプロジェクトのモデルとして高く評価されております。プロジェクト終了後は、国立大学として運営がなされ、ナイロビ大学に肩を並べる高レベルな大学と評価され、2008年での学部学生数15,500人、大学院生数1,000人の大規模な大学へ発展しているようです。著者が派遣された時代のJKCATは学生数700－800人でしたので、20倍近い学生数の増加であり、その発展振りには驚いております。

一方、日本ババロア会は、1998年、これまで本プロジェクトに派遣された専門家、協力隊員ならびにJICA関係者の拠金を持って学生の学資支援の目的で、プロジェクトが完全に終了する2000年の寸前の1998年に、本プロジェクトの産みの親でもある中川博次先生（京都大学名誉教授）、岩佐順吉先生（岡山大学名誉教授）の両先生の音頭で設立されました。このババロア会奨学金は1998年を第1回として10年

の約束で成績優秀な学生に支給されてきて2008年の第10回までに総計400余名の学生に授与がなされました。その後も５年間の延長が決まり、2012年まで奨学金の支援をするものです。

ここで言えることは、大学の建物、施設、設備のハード的支援、並びに教育・研究技術のソフト的支援がODAによる技術協力で達成されたとしても、大学で学ぶ学生に対する支援協力が充分でないと、特に発展途上国では経済的背景から高等教育における人材育成は不十分となり得るのは明白です。この観点から、立ち上げから30余年の歩みがあるJKUATとババロア会はプロジェクトの永遠の発展を願い、不滅の技術協力体制にあると言えます。

筆者も縁あって1986年から長期専門家として１年間、そして６年後の1992年に短期専門家として５ヶ月間、JKUATで技術協力をしたことが原点となって、その後の留学生受入れ、国際交流、世界観等が醸成されたことは言うまでもありません。その意味も含め、JKUATプロジェクトの不滅と未来永劫の発展と進化を願うものです。

【参考資料】日本ババロア会「JKUATババロア信託基金年報」
第８号(2006年)～第12号(2010年)

「JICA九州設立20年～地域リソースとの更なる連携を」

独立行政法人国際協力機構　九州国際センター
所長　小　林　正　博

南国宮崎は、もう春の装いでしょうか。宮崎県JICA派遣専門家連絡会会員の皆様におかれましては、ご健勝にてご活躍のこととお察し申し上げます。

おかげさまで、私どもJICA九州国際センターは、北九州市の地に設立されて20年、九州のみなさまとともに歩み、今日まで成長することが出来ました。こうして成人となったことを記念し、年間700名以上を受け入れるJICA九州の主な研修分野である「保健医療」について「かけがえの無い命を守るため～感染症対策に見る国際保健医療協力」と題する、さらに「環境」について「アジア低炭素社会の構築に向けて」と題する二つの国際シンポジウムを、１月と２月に開催いたしました。

ここで共通するテーマは、新型インフルエンザなどの感染症も、二酸化炭素の排出に伴う地球温暖化も、「国境」を越えた、グローバルでボーダレスな課題として、わたしたちの暮らしに直接的に関わっていると言うことです。保健医療シンポジウムで基調講演された国立感染症研究所田代眞人インフルエンザ研究センター長は、『今回、地球規模で蔓延はしたものの弱毒性のため多大な健康被害はもたらさなかった「豚インフルエンザ」だったが、この経験から油断して、いずれ発生が懸念される強毒性の「鳥インフルエンザ」への警戒を怠ると、世界は、かつてない甚大な健康被害に見舞われる可能性がある』と大いに警鐘を鳴らしています。かつてのスペイン風邪の世界的蔓延には半年を要しましたが、今日のインフルエンザは一週間以内に世界的流行を引き起こす可能性があります。世界中が一体となって、また、都市間で連携して、この目に見えない敵に対処する必要があるのです。一方で、国連という枠組みの中で混迷を深める多国間の気候変動協議や国家レベルの連携は遅々としていますが、それを尻目に、九州を中心に様々な都市とアジアの主要都市が、国境を越えて持続的開発と環境への取組みを進め、これら都市・地域レベルの連携は顕在化しつつあります。

九州各地では、過去に起こった環境劣化・公害の克服、地域医療も含め健康で住みやすいまちづくり、ごみも含め限られた資源の有効利用リサイクルが意欲的に進められています。また、地域の特色ある産品の開発、食の安全確保、地産地消の促進など、人に優しい環境づくりも着実に広まりつつあります。今、これらの知識や経験が、世界中から求められています。宮崎県では、宮崎大学やアジア砒素ネットワークによる南アジアを中心とした総合砒素対策への取組み、宮崎国際ボランティアセンターによる自

立発展的な小規模農家育成など、JICAの草の根技術協力を活用した優れたプロジェクトが現在進められています。

先ごろのコペンハーゲンでの気候変動にかかる国際会議が、南北対立の様相を呈した一方で、地域の産学官および市民が一体となった環境への取組み、地域起こしが各国で着実に進展しており、さらに国境を越えた都市間、地域間の連携も九州を中心にあちらこちらで見られることは、ひとつの救いでもあります。九州の地で住みよいまちづくり、地球に優しいものづくりを学んだJICA研修員の活躍もしばしば聞こえてくるこのごろ、国際協力の風は中央ではなく、地方で吹いていると感じるのです。成人となったJICA九州も、さらに地域のリソースと連携して住みやすい地球づくりに取り組みたいと思いますので、引き続き海外での経験とネットワークをお持ちの派遣専門家やボランティア経験者の皆様からお力を頂ければと存じます。

宮崎で夢見る農業

しょうご農園　佐々木　正　吾
派遣国：ドミニカ共和国

1、 はじめに

長年の夢であった農業を始めるため、都城市高城町に移住したのは2005年6月でした。妻と二人で、大淀川支流の有水川上流域にある自然豊かな場所に、「しょうご農園」を作っています。描いた理想を自分の手で形にしていく日々は充実感に満ちています。北海道生まれで宮崎に親戚も居ない私が、いくつもの偶然に導かれて、ここに辿り着いたのは運命といえるでしょう。これまで平坦な道のりではなかっただけに、支えてくれた多くの人々に感謝をしています。本稿では、「しょうご農園」について、そして途上国での大切な思い出を一つ紹介させていただきます。

2、「しょうご農園」の現状と課題

私が目指しているのは、最良の農業形態だと確信している「小規模有畜複合農業」で、地域に適した有機栽培と自然養鶏を組み合わせていく計画です。

農園の柱である自然養鶏では、300羽の純国産鶏「もみじ」に、国産材料を配合して発酵させた手作り飼料と、新鮮な緑餌を与え、広い運動場で遊ばせて飼育しています。この健康な鶏が産む卵を県内外の消費者80軒が定期購入してくれます。私たちの生産する自然卵「和卵（かずらん）」は、安心して食べられる普通の卵です。卵かけご飯が好きなお客様から特に好評で、「もう他の卵は食べられない」と言ってくれます。これぞ農家の喜びです。

５年目に入って自然養鶏が軌道に乗り、仕事のリ

写真１　新鮮な緑餌を食べる元気な鶏たち（右著者、左妻）

写真２　自然の中に位置する手作りの鶏舎（一部）

写真３　しょうご農園自然養鶏場の純国産鶏「もみじ」

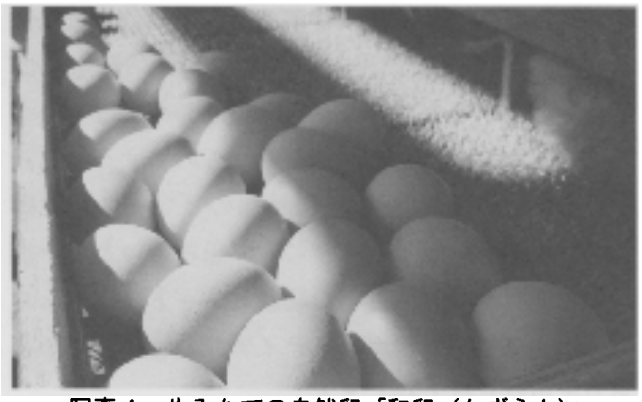


写真４　生みたての自然卵「和卵（かずらん）」

ズムも固まってきました。そして、良質な自家鶏糞を肥料として、畑作と稲作を始めるための準備を始めています。

まず必要なのは農地の取得ですが、これには頭を痛めています。農地法の条件と閉鎖的な農村社会によって、外部から入植した人間が新規に農地を買うことは簡単ではありません。荒れた農地が増加して過疎化が進む原因は、ここにあると知りました。しかし、年内には解決できるよう頑張っています。楽しいことをするのに苦労はつき物。前進あるのみです。

３、　コスタリカの友人

さて、このように私が農業を始めたことを、一番に喜んでくれた友人たちがいます。彼らは私が青年海外協力隊として活動したときのカウンターパートです。彼らとの出会いがあったからこそ、その後続いた国際協力業務があり、そして、今の私があります。続いて、20代の頃を思い出しながら、その友人について紹介します。

私のJICA国際協力の経歴はコスタリカ共和国で７年、ドミニカ共和国で５年３ヶ月、そしてエルサルバドル共和国（業務は中米広域）で２年、合計は14年３ヶ月になります。

写真５　コスタリカの友人たちと（1992年）

スタートとなった青年海外協力隊への参加は1988年で、私が25歳のときでした。２年半勤めた北海道の民間会社に震えた手で退職届を出し、期待以上に不安を抱えて決断しました。土壌肥料隊員として派遣されたのは「中米のスイス」と呼ばれるコスタリカ共和国。標高1800メートルの野菜生産地にある農協が職場で、有機質肥料の普及から開始しました。化学肥料と農薬だけを使う農業が主流の現地での活動は、若さの勢いだけが頼りの無謀な挑戦だったかもしれません。

３年間の活動で、コスタリカ初の農民による有機栽培を成功させました。この農民が私の友人たちです。この成果は、小農である彼らの自主性と自己犠牲があったからこそ達成できました。私の帰国後も彼らは、自助努力で技術を向上してグループを組織し、契約栽培による市場を確保しました。さらに、地域内外の農民に協力して「農民から農民への技術移転」を実証し、有機農業の先駆者として中米だけでなく欧米など各国で講演をしてきました。そして、2004年にはコスタリカの農業発展に貢献した功績が認められ、グループリーダーであるHenry Guerreroが同国最年少で大統領からメダルを授与したのです。

また、普及員を対象にしたJICA地域特設研修「小規模農民支援有機農業技術普及手法」では、2008年からのコスタリカ現地研修で、彼らの有機農民グループが実習を担当しました。そして近隣国のJICA農業プロジェクトからも多くの視察・研修を受け入れています。

22年前に一緒に手探りで有機農業を始めた友人たちは、日本のODAに協力するまでに成長しました。華々しい成果の影にあった無数の困難を知っているがゆえに、純粋に彼らを尊敬します。そして、「彼らのような農家になりたい」と思い、これが農業をやろうと決めた大きな動機となったのです。まさしく、人を動かすのは人であると実感しています。

４、　これから

豊かな日本での生活で感じる大きな不安は、命を支える農業のありかたです。効率と生産性を優先して集約化が進む農業は、経済動向などの見えない力の影響を受けて、とても危なっかしい姿をしていま

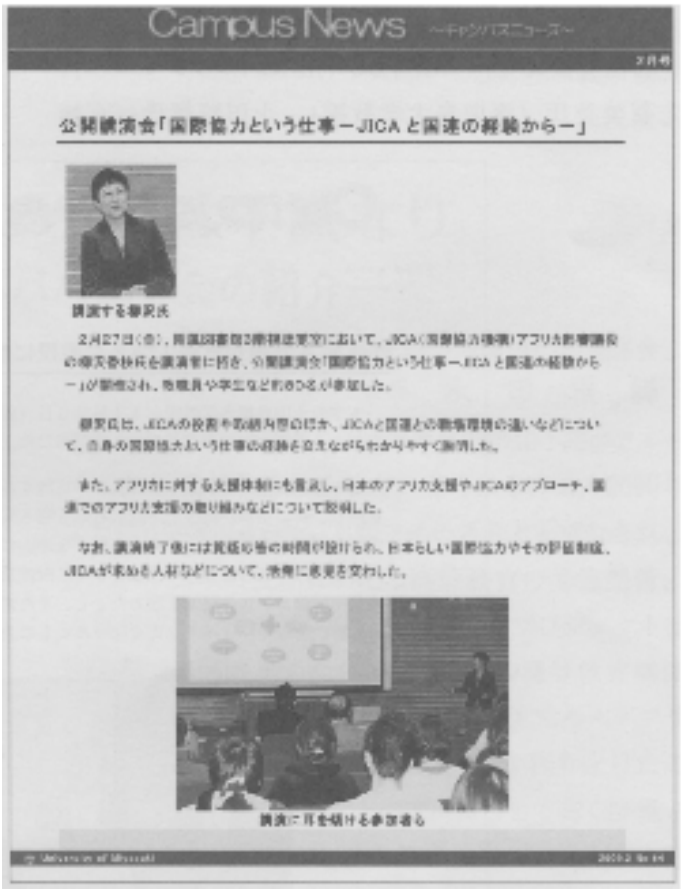
す。改善のヒントは、遠い中米の友人たちが作り上げている農業スタイルにある気がします。シンプルで楽しくて小さく安定した農業。私はそんな農業を「しょうご農園」で実践できればと願い、人生の本番を始めたところです。そしていつか将来、コスタリカの友人と再会して昔のような美味い酒を飲めることを楽しみに、静かな山間で元気に働いています。

（「しょうご農園」ホームページ
http://www.btvm.ne.jp/~shogo.noen/）

事務局からの報告（1）

公開講演会「国際協力という仕事 ―JICAと国連の経験から―」の開催

JICA派遣専門家連絡会（主催）と宮崎大学国際連携センター（共催）は、平成21年２月27日（金）16時から宮崎大学附属図書館において、講師にJICAアフリカ部審議役　柳沢香枝氏を招聘し、「国際協力という仕事　―JICAと国連の経験から―」の公開講演会を開催しました。当日は学生の参加が多く見られ、宮崎大学での国際協力に対する関心が高いことが伺えました。この試みは、本連絡と大学の連携活動の一環となるものです。これからも機会を見て、このような活動を広げて行きたいと思います。この公開講演会は、宮崎日日新聞及び宮崎大学で広報されましたので、それらを掲載します。ご参照下さい。


Campus News ～キャンパスニュース～

公開講演会「国際協力という仕事ーJICAと国連の経験からー」

講演する柳沢氏

講演に耳を傾ける参加者ら

キャンパスニュース２月号

国際協力の現状紹介

県JICA派遣専門家連絡会

県JICA派遣専門家連絡会（永田雅輝会長）は二十七日、国際協力について考える講演会を宮崎市の宮崎大付属図書館で開いた。同会の会員や同大学の学生ら約八十人が参加、途上国援助の在り方や課題に耳を傾けた。

国連に勤務したこともある国際協力機構（JICA）アフリカ部審議役の柳沢香枝さんが「国際協力という仕事」と題して講演。世界で支援活動を行ってきた経験から「組織力が強くチームで仕事をする」「異なる文化が混ざり合う職場環境」などそれぞれの組織の特徴を説明。天然資源に恵まれ少しずつ経済成長を続けるアフリカ諸国の現状について紹介し「両組織が協力しながら、長い期間をかけて支援先が力を付けていくような援助が理想的」と話した。

自身の経験を踏まえながら、国際協力のあり方について語るJICA（国際協力機構）の柳沢さん

2009・2・28　宮崎日日新聞社

事務局からの報告 (2)

「JICA九州20周年の夕べ」が開催されました

JICA九州国際センター（小林正博所長）では、平成21年10月30日同センターにおいて、開設20周年を記念して、「JICA九州20周年の夕べ　20周年セレモニー」が開催されました。式典では、この間にJICA事業に関連し、永年わたって貢献した個人、団体に対して感謝状の授与がなされました。

表彰を受けた個人は、木下俊哉氏（北九州市八幡区自治会長）、佐々木正躬氏（元JICAカウンセラー）、志賀美英氏（鹿児島大学教授）、永田雅輝氏（宮崎大学名誉教授）の５名でした。団体は、NPO法人アジア砒素ネットワーク、石川金属工業株式会社の他14企業でした。

個人表彰の永田雅輝氏は、本連絡会の会長であり、今回の感謝状授与には、連絡会と大学との連携活動も評価されており、早速、宮崎大学の菅沼龍夫学長へ報告をしました。大学ではこのことをHP、キャンパスニュース、文教速報で広報がなされました。その一部を下記に掲載します。

Campus News ～キャンパスニュース～

学内ニュース　外部資金　人事異動　大学紹介　トップページへ　11月号

ＪＩＣＡ九州が宮崎大学名誉教授に感謝状贈呈

本学の永田雅輝名誉教授が１１月３０日（月）、菅沼龍夫学長を訪問し、ＪＩＣＡ九州より感謝状が贈呈されたことを報告した。

この感謝状贈呈は、ＪＩＣＡ九州が実施する国際協力業務に長年にわたって協力・貢献し、特に功績があったと認められる個人又は団体を対象に表彰する制度で、永田名誉教授は、本学とＪＩＣＡとの様々な連携に大いに貢献したことをはじめ、ケニア国立農工大学に技術協力専門家として２度派遣されるとともに、多年にわたりＪＩＣＡ研修コースの講師を務めたこと、また宮崎県専門家連絡会会長として県内ＪＩＣＡ専門家のネットワーク化を図ったことにより表彰された。

感謝状を手にする永田名誉教授（左から２人目）と菅沼学長（右から２人目）

キャンパスニュース　11月号

編集後記

JICAエキスパートみやざき第12号（宮崎県JICA派遣専門家連絡会会報）をお届けいたします。本エキスパートみやざきを通して会員相互の連絡を密にして、本会の発展につながりますように皆様方の会報へのご提案、ご意見をお待ちしております。

ご連絡は、下記の世話人へ頂ければ幸甚です。

会長：永田雅輝、幹事：位田晴久、山本正悟、大野和朗、佐伯雄一

事務局：〒889-2192　宮崎市学園木花台西１－１　宮崎大学農学部内